

# モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



コールゾーンに待機する男子ユース。



決勝までマスキングされていたルートをオープン。選手は6分のオブゼベーションに入った。

## アンコール・カップ(1)

### 人材

コンペをやるよと決めた6月、シンガポールの某国際財団が資金援助するNGOを探しているという話が友人を介して伝わってきた。早速、バーストリートのレストランで財団の理事に会った。パリパリのビジネスマン風を想像していたら、若い女性だったので、ちよつとびっく

りした。活動のテーマがクライミングだと知って彼女、Ms・Gは好きらしい。結局、この財団は動かなかったが、こういう訳かMs・Gが個人的に僕らを支援してくれることになった。可哀想なおじいさんに見られたのかも。例えば、僕の書く公式の英文書類は、Ms・Gが滑らかな英文にリバイズして然るべき相手に渡る。また、アンコール・クライマーズ・ネット(CAN)

## 目指せ、アンコールクライマー誕生!!

のFacebook ページの運営も、自然発生的に彼女がやりだした。『遠距離秘書』といった贅沢なノリだけれど、とにかく問題の幾つかは解決したのだ。

7月から毎週末の定例ミーティングでスムロン、キムスロイらと、アンコール・カップ開催をメインに様々な課題について話合った。IFSC(国際スポーツクライミング連盟)の最新ルールブックを印刷して、僕らはルールについての勉強会も持つことにした。

しかし何よりも、国際クラススのコンペの運営を指導できる人材は恐らく実務に冴える成熟したクライマー、が必要だった。知人友人やネットを通じて探したが、秀でたクライマーの多くは野心が強く、僕らの考える『ランニング・コンペ』(みんなで学ぶコンペ?)の運営指導者としてはいささかアンマッチだった。かのクリス・ポニントンが、天才クライマーを募るよりも実務のできる優秀なクライマーを探す方が難しいと、その著書『Everest, the Hard Way』で述べているのを思い出し、僕はひとりで肩をすくめた。無給だし

なあ。そして、指導者の決まらないまま準備を進めてはいたが、開催まで1ヶ月を割るとそうもいかず、2012年の年明けと同時に自力でやる覚悟を決めた。

### ワークショップ参加の給付金

コンペを盛り上げるために、雨季明けを目前にした10月中旬からコンペまでの毎週日曜に、近隣の中高校生を対象にワークショップを計画した。ここで問題になったのは、ワークショップに参加する生徒に渡す給付金だ。

講習料は教えてもらう側が払うと僕らはふつう思うが、今のカンボジアでは逆だ。多くのNGOでは、ワークショップに参加する生徒に、交通費支援という名目で、給付金を支給するのが通例となっている。そうしなければどの分野の普及活動も一歩も進まないからだ。カンボジアには一般の市民の利用を想定した市街を移動する公共の交通機関がない。それが給付金の存在を、強固に正当化してもいい。

(続く)